

# 女子美

No.155/2006



2P スピクニュー・リブチンスキー氏インタビュー  
4P 芸術学部1年次が相模原キャンパスへ他  
5P 「たっちゃんのコネク島」を開発・販売開始、陳進展  
6P 永井一正氏講演会報告  
9P 森啓客員教授が佐藤敬之輔賞を授賞、特別講義  
10P 活字文化フェスタ、女子美オープンキャンパス  
11P 就職セミナー報告・奥村心雪さん  
12P 大地の芸術祭、はっぱプロジェクト他  
13P スポーツフェスタ、ミイラ復顔プロジェクト  
14P 研究員 李元求教授インタビュー  
16P エブテック応用科学大学アートデザイン学院協定締結  
17P バーミンガムから短期留学他  
18P シリーズ教養ゼミレポート②林正寛ゼミ  
19P 女子美アートミュージアム展覧会情報  
20P 公募展受賞者紹介、シリーズ女子美探訪④

女子美術大学広報誌

メディアアート学科客員教授

Interview

## ズビグニュー・リップチンスキー氏インタビュー



1970年代初頭からヨーロッパとアメリカでフィルムディレクターとして活躍し、アート・オブ・ノイズ、ジョン・レノン「イマジン」などのミュージックビデオをはじめ、作品は米国、日本、ヨーロッパの映画・映像業界で数々の栄えある賞を受賞して世界的に高い評価を受けているズビグニュー・リップチンスキー先生。ありきたりなもの、一般的なものをモチーフにしなが、高度なビジュアル技術を駆使して、日常の中に潜む「ストレンジ」を異化一視覚化する。そんな作品は観る人を惹きつけてやみません。2006年度メディアアート学科の客員教授に就任された先生からこれからアーティストを目指す学生たちに熱いメッセージをいただきました。

## 人の内面こそリアリズム

「私たちは現実にはごくありきたりの日常生活を送っています。これに対して映画というのは往々にして非日常的な事柄やカタルストロフィ、現実ではないことなどをテーマにします。あるいは物事を非常に単純化しすぎる傾向があります。例えば犯罪映画の銀行強盗のシーン。現実の中で銀行強盗が起こる場合には決してドラマチックにおこなわれるわけではなく、人に気づかれることさえなく街のどこかで起きるわけです。ところがひとたび映画になるとドラマチックに扱われ、誇張されるくらいがある。そして観客はこうした単純化され、誇張され

たものを信じているわけです。表面一皮の、浅いテーマを扱っているにも関わらず。問題は、ありきたりな日常の出来事を、従来使われている方法を模倣する以外で描写する術がなかったということです。日常を描写するにあたって使えるテクノロジーが非常に原始的な、洗練されていないものであったために、私たちの頭の中にある思いや考え、イマジネーション、夢などをフルに描写するにはとても追いつかなかったわけです。私たちは会話が弾めば2、3時間でも電話を続けてしまうことがあります。電話をするときには身の回りのものを眺めているわけではなく、頭の中で様々な想像をしているわけです。ひとの想像力というのは非常に豊かなもので、頭に描くイメージというのはみんなが持ちうるものです。しかしこれを描写する、可視化することができないわけです。それで陳腐な話を大げさに取り上げたり、誰が誰を殺したとか誰が誰を愛したという話ばかりを映画にする。しかし私にいわせれば、本当は人の頭の中にあることの方がずっと面白く、それぞれがリアリズムです。そして昨今のテクノロジーの進化、映画制作技術の進歩にともなう、ごく普通の日常の出来事を非常にアトラクティブに描写する、つまり、ノベライズ、小説化することができるようになったと言えます。こうなれば、日常をテーマに扱うことこそ適切なことではないかと思うのです。」

## 鍵を握るのはトライアンドエラー

「人間というのは、一定の思考方法やアイデアをもって生まれるものではありません。発想というものは生まれつきのもではなく、あくまでも後天的に学習するものです。人間というのは住んでいるところの文化から切り離せないわけですが、どんなに知的に優れた人でも、まったく新しいものを創り出すということはできない。大概、人は、既におこなわれていること、わかっていることを繰り返すのです。では新しいことを創造するにはどうしたらいいのか。この方法論は、実験を通してしかありえないのではないかと思います。ここでいう実験とは、すでに知られている各種の要素を新しい形で組み合わせ、構成することです。もうひとつつ重要なのは、自分自身に厳しい目を向

けること、自己批判精神を旺盛にもつことです。既知の要素を新しい組み合わせ、あるいは方法でやってみること、それによって出てきた事象を面白いと感じるようなセンサーや自己批判精神を持ち合わせれば面白いものができるのです。」

## ストレンジなものが好奇心を掻き立てる

「何を面白いとするかは議論のあるところですが。面白いと思うものが見えたときには、目では認識しますが、頭では認識できません。「何だろうこれは」と頭が解釈を求めて働き出します。例えばシュールレアリスムの絵画は人の体、土地、あるいは空間、奥行きなど、見る人が日常生活の中で知っていて認識できるものが絵の中にたくさん入っているので、見る人の脳を刺激する効果があります。脳が何かを認識し、「何を意味するんだろう」と解釈を求めて動き出すからです。それに対して、抽象画というのは、疑問の余地がない。モダン・アートのギャラリーに行くと人はせいぜい二秒から五秒みても次の作品へと行く。脳が動いていない、見たものから刺激を受けていないからです。好奇心を掻き立てるに足るものではないのです。好奇心を掻き立てるものというのは、ストレンジなものです。ユニークで変わったものです。そういった意味では人の頭の中で起きること、イマジネーション、考え、シュールレアリスムこそストレンジなのです。考えにふけている人の頭の中ほど面白く、変わっていて、好奇心を掻き立てるものはありません。すなわち、人の頭の中のものにはアートになりうる、芸術の対象になりうるのです。実際に、現在のメディアはリアル・リアリズムつまり、人の頭の中、脳を可視化する方向に進んでいると思います。」

## 文明の発達＝ストレンジなものを創り上げること

「ストレンジなものを発見する、あるいは作り上げていくことというのはすなわち文明の発展だと私は思っています。世界はストレンジなもので溢れています。象徴的なものや何かを記念するもの、ピラミッド、エッフェル塔、日本の侍などがその例です。」

また、チャーリーチャップリン、ミッキーマウス、スターウォーズ、いずれも私の言うところのストレンジなものです。面白いことにこれらストレンジなものは時を経て人々に受け入れられ、意味を付与されることによって、私たちの遺産の一部になってきました。私の持論では、普通でないもの、ストレンジなものをつくる、ということはイコール、文化をつくる、文明を創るに等しいのです。これは決して現実を復元したり、繰り返すこととは違います。映画制作者として仕事を始めた時点で私の時代においての最高の映画というのは黒澤明監督などによってすでに創られていました。それで私が映画制作者として成功する唯一のチャンスは数多くの実験的な作品を通して、これまでとは違った形で人々や世界を描写する方法を実現するしかないと思いました。これまで取り組んできた作品はすべてそういった実験精神で取り組んできました。作品を制作するにあたっては使えるツールや技法について十分な情報と知識を集め、習得するよう努めてきました。作品も年を追って複雑になってきました。HDDC、デジタル技術、インターネットなどの登場、使える技術の進歩によって、複雑にならざるを得ませんでした。私が目標としているのは数多くの人にインパクトを与え、しかも内容が愚かでない、感動的なものを創ることです。」

## 未来への扉を開くことのできる立場に気づく

「私たちの生きている世界は、残念ながら一日24時間しかありません。人生のうち最も大きな喜びをもたらすことというのは、自分たちがこの時代のいろいろなものの最前線にあって、未来への扉を開くことのできる立場にいるということに気づくことです。新しいメディアテクノロジーを使って実現できることは五万とあります。これを探していくことがメディアメーカーにとっての大きな課題であり、本当に一生懸命に取り組む必要があります。例えば、医学や工学や科学に携わる人は専門を極めるために猛烈に勉強するわけですが、アーティストもそれと同じくらい時代や世界や歴史やテクノロジーについて勉強すべきだと思います。一日24時間では足りないのですが(笑)。若い人は目先の成功を求めがちですが、それは短期的な成功にしかつながらない。成功するために何ができるのかと考えるよりも、できることはたくさんあるので、これを実現するのに自分に十分な時間があるのか自問すべきだと思います。ある人が言った言葉でいい得て妙だなと思った言葉を紹介します。—未来に大変関心がある。なぜかといえば私の人生の大半はその未来で過ごすからである—」

(インタビュー・文：広報課 林 亜紀子)

## Zbigniew Rybczynski (ズビグニュー・リブチンスキー)

1949年ポーランド生まれ。ウッチ映画大学の撮影科を卒業し、1970年代以降はヨーロッパ諸国、米国にてフィルムディレクターとして活躍するほか、ハイ・デフィニション・テレビ技術の利用におけるパイオニアでもある。また、近年では「I photo」という携帯電話のカメラを利用した合成写真技術の開発もおこなひ、映像技術の技術革新に大きな役割を果たしてきた。

### ■主な作品と受賞歴

- ミュージックビデオ
  - ・John Lennon 「IMAGINE」(1987) カンヌ広告祭銀賞受賞 リオ国際映画祭特別賞受賞
  - ・Yoko Ono 「HELL IN PARADISE」(1986) ビルボード・ミュージック・ビデオ・アワード 最優秀インベティフ・ビデオ賞受賞
  - ・Art Of Noise 「CLOSE TO THE EDIT」(1985) MTV アワード最優秀エクスペリメンタル・ビデオ賞受賞
  - ・MTV アワード最優秀編集賞受賞
  - ・Pet Shop Boys 「OPPORTUNITIES」
  - ・Mick Jagger 「LET'S WORK」
  - ・Lou Reed 「THE ORIGINAL WRAPPER」 他多数
- 短編映画
  - ・「STEPS」(1987) リオ国際映画祭(ブラジル) 最優秀ビデオ・プログラム受賞
  - ・「TANGO」(1980) アカデミー賞®最優秀短編アニメーション賞受賞 アヌシー国際アニメーション映画祭(フランス) 大賞・観客賞受賞
  - ・オーバーハウゼン映画祭(ドイツ) 大賞・国際批評家連盟賞受賞
  - ・ウエスカ国際短編映画祭(スペイン) 大賞・観客賞受賞
  - ・オタワ映画祭(カナダ) 観客賞受賞
  - ・タンペレ映画祭(フィンランド) 最優秀アニメーション賞受賞
  - ・クラカウ映画祭(ポーランド) 主賞受賞
  - ・「MEIN FENSTER<私の窓>」(1979) オーバーハウゼン映画祭(ドイツ) 受賞
  - ・「NOWA KSIAZKA<新しい本>」(1975) オーバーハウゼン映画祭(ドイツ) 大賞受賞他
  - ・「ZUPA<スープ>」(1974) シカゴ映画祭(アメリカ) 金賞受賞
  - ・クラカウ映画祭(ポーランド) 主賞受賞他
- 長編映画
  - ・「KAFKA」(1992) サンフランシスコ国際映画祭金賞受賞他
  - ・「THE ORCHESTRA」(1990) エミー賞(アメリカ) 特殊技術賞受賞他



John Lennon 「IMAGINE」(1987)



「TANGO」(1980)



Yoko Ono 「HELL I N PARADISE」(1986)



「MEIN FENSTER <私の窓>」(1979)



Art Of Noise 「CLOSE TO THE EDIT」(1985)



「ZUPA<スープ>」(1974)



「STEPS」(1987)



「KAFKA」(1992)

## NEWS ● ① 芸術学部1年次が相模原キャンパスへ

本学では、平成19年4月より芸術学部1年次を相模原キャンパスに移転し、以降すべての年次までの一貫した教育を同キャンパスで行います。これは、現在杉並キャンパスで1年次、相模原キャンパスで2～4年次と分かれている教育体制を改善するものです。同時に、相模原キャンパスでは「創造性を引き出す環境づくり」を目指し施設・設備の拡充を下記の通り昨年より実施しております。これらの施策により、クラブ活動の円滑化や上級生との交流といった学生生活の向上、作品制作・学修環境の更なる充実も図ります。なお、杉並キャンパスでは新校舎を建設するキャンパスの再整備を計画しております。

○（仮称）ICT棟の建設（Information & Communication Technology：情報通信技術）

校内のコンピュータによる専門教育の中心的施設として、コンピュータに関わるリテラシー教育および美術・デザイン分野での専門的な教育を行うICT棟を建設します（平成19年4月利用開始予定）。同棟はデザイン学科、メディアアート学科およびファッション造形学科の施設としても利用します。

○（仮称）新アトリエ棟の建設

絵画学科洋画専攻、立体アート学科の作品制作スペース等として、新アトリエ棟を建設します（平成19年4月利用開始予定）。

○ガラス工房（518教室）の設置

工芸学科ガラスコースの充実を図るため、ガラス熔融炉を備えた吹きガラスのための工房を開設しました。これにより、ガラスの原料からガラス素材をつくり作品を造形

できるようになり、より深い技法の習得、自由度の高い作品制作が可能となりました。

○5号館（517教室）、8号館別棟（817～819教室、825～827教室、835～837教室）及び10号館別棟（1012教室）の増築

増築して設けられた施設は、大学院、芸術学部絵画学科及びメディアアート学科のスペースとして、平成17年9月より学生の制作活動に利用されています。517教室は大学院の陶研究領域の専用スペース、8号館別棟の各教室は絵画学科洋画専攻・日本画専攻、大学院の洋画・日本画・版画各研究領域のスペースとなっており、また紙すきの設備を置いています。1012教室はメディアアート学科の立体作品の制作スペースとなっています。



ICT棟パース



ガラス工房

## NEWS ● ② 新宿落書き消去・安心安全まちづくりキャンペーン

短期大学部造形学科デザインコース情報メディア系の学生が、新宿区戸山小学校・幼稚園・近隣道路ガード下にて壁画を制作しました。この壁画制作は、東京都・新宿区・新宿警察署（東京都新宿区）の3者が主催する落書き消去キャンペーンの一環として実施されたもので、本学の学生は壁画の図

案や下絵作りから制作に協力しました。5月10日には戸山小学校の生徒や戸山幼稚園の園児と一緒に、校舎の外壁に草花や野山を駆け巡る動物の楽しい壁画を描きました。

なお、今回「新宿落書き消去・安心安全まちづくりキャンペーン」の協力に対し

て17日、新宿警察署から表彰されました。同日、署長代行としてピーポくんが杉並キャンパスに来校し、木下道子教授（短期大学部造形学科デザインコース）が表彰状と記念品を受け取りました。



## 障害児療育支援システム 「たっちゃんのコネク島」を開発・販売開始

本学メディアアート学科プロジェクトチームは、女子美術大学研究所の支援を受け、杉並区立こども発達センター、(株)キャドセンターとの産官学共同研究により、障害児のための療育支援用コミュニケーションシステム「たっちゃんのコネク島」を開発し販売を開始しました。

本システムは発達の遅れや偏りのある幼児、発達年齢が概ね1歳からの子どもを対象にしたもので、軽く画面に触れるだけで絵が動き音楽が流れるなど、誰でも簡単に楽しむことができるコンテンツと高感度タッチ式ディスプレイシステムです。

心身に障害がある子どもの発達支援には、他者とのコミュニケーションの姿勢を育てることが重要です。また視覚・触覚・聴覚といった五感に訴えかける方法が有効であり、マルチメディアの活用が考えられます。メディアアート学科ではマルチメディア技術を障害児療育に活用しようと、教員・学生有志が参加してコンテンツの開発に取り組み、杉並区内の療育施設や企業と連携し、

複数の人が画面をタッチし遊びながらコミュニケーションを楽しめる「触れる絵」を完成させました。

高感度タッチ式ディスプレイ NEXTRAX (TM) 50インチ版、15インチ版と組み



合わせたシステムを販売する一方、ソフトのみの販売も行っています。

現在、お試用デモ CD を無料配布中です。杉並区立こども発達センターでの実際の療育の様子が収録されておりますので併せてご覧ください。お問い合わせは、下記ホームページよりお願い致します。

女子美術大学メディアアート学科・女子美術大学研究所・杉並区連携「産官学共同レインボープロジェクト」

<http://www1.joshibi.ac.jp/rainbow/>  
(芸術学部メディアアート学科教授 川口吾妻)



## Topics ● ① 陳 進 展



1920年代末（昭和はじめ）に女子美術学校で学び、その後台湾を代表する女性画家の一人となった陳進の生誕100年を記念する展覧会が、渋谷区立松涛美術館で2006年4月5日から5月14日まで催されました。

陳進は1907年に台湾の裕福な家庭に生まれ、当時台湾で教鞭をとっていた日本画家の郷原古統に教えを受けた後、その勤めもあって女子美術学校に入学します。単身上京した陳進は、女子美在学中の1927

## —台湾の女性日本画家生誕100年記念—

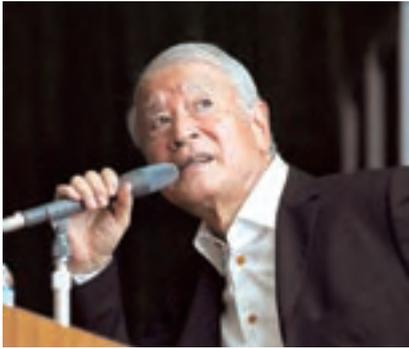
年に創設された台湾美術展（「台展」）に第一回から入選し、以後毎年入選を続けて第六回からは審査員となりました。そうした中、女子美で身に付けた日本画の技法を生かして、優美で透明なタッチの中に力強さを含む女性の姿を描く画風を次第に確立し、1934年第15回台展では「合奏」という作品で初の入賞、その後帝展、文展などに相次いで入選しました。アジア・太平洋十五年戦争の終結によって日本の植民統治から台湾が離れた後、一時画業から遠ざかっていた時期がありましたが、やがて力強く復活し、1998年に歿するまで旺盛な創作活動を続けました。後半生は家庭の日常の中に素材を求め、穏やかで芯のある女性像などを多く発表しています。今回の展覧会はそうした陳進の代表作八〇点ほどを中心に、残された素描や関連資料などの展示を含めた興味深いものとなりました。



会期中の4月15日には「陳進とその師たち——「台展」デビュー前後」と題して島村が講演を行いました。講演では、戦前アジア地域でただ一つ、女性のための美術の高等教育機関としてあった女子美の歴史性に触れ、そこで学んだ陳進がアジア各地域で大きな仕事をした卒業生の中の重要な一人であることを明らかにしました。結城素明、遠藤教三ら女子美の教員たちから多くのことを吸収したのはいうまでもないことですが、そこにとどまらず、松林桂月、籾木清方、山川秀峰らの多くの優れた日本画家たちとの交流を通じて、彼女は日本画の方法を台湾にもたらし、根付かせた先達でした。また台湾での女性画家のパイオニアとしての役割も大きかったと同時に、日本とは異質の文化を持った台湾で独自の画風を切り開く際に、その文化に向けたまなざしにも興味深いものがあったことを指摘しました。この展覧会はNHKの「新日曜美術館」で取り上げられ、その後福岡アジア美術館にも巡回しています。日本の師に学び、女性の視点で台湾の風土と歴史に根ざした作品を描いた陳進への関心の高まりを感じさせてくれる展覧会でした。

(芸術学部基礎教養系教授 島村 輝)

## Lecture ● ● ● 永井一正氏講演会報告 主催：別科 現代造形研究室



6月8日、別科現代造形研究室の主催でデザイン界の巨匠、永井一正先生の講演会がおこなわれました。収容定員260名の4401教室は満席で通路まで学生でいっぱい。学部学科を問わず大勢の学生が詰め掛けました。講演は、永井先生の作品を解説とともに一通り映像で見せていただいた後、本学の伊勢克也教授と学生からの質問に答える形でお話していただきました。

### 灰色の青春時代

伊勢：僕は学生のころ、20年前に永井先生の講演を聴きまして、その後20年、永井先生の作品はずっと見てきました。そんな中で少し気になったところなどを質問させていただきたいと思います。まず、永井先生は東京芸大の彫刻科に入学なさいましたが、あることがあって彫刻の道を諦めてデザインの方に行かれたと伺いました。そのあたりの、デザイナーとして仕事を始めるまでの話をお願いします。

永井：私の青春時代は戦争のあった灰色の

時代でした。そのころ私は大阪にいて、中学生だったのですが授業もなく、勤労働員で工場に行ったりとか塹壕を掘りに行ったり、食べ物が全くなって、いつもひもじい思いでふらふらしていた。そこへ日夜B29による空襲が続いていた。ですから、いつ死ぬか全くわからないという、希望も何もない日々を過ごしていました。

中学2年のときに大阪大空襲で、ちょうど私がちょっと自分の部屋を出た時に、そこへ焼夷弾が落ちて家が全焼した。まあ2〜3分遅ければ、今頃生きていないですね。終戦を迎えてからも食糧は全くなく、さらに、父が、当時の満州に民間の会社の責任者として行って、ソ連に抑留され全行方不明になってしまった。私は旧制中学を卒業したあと、一大決心して、伝手を求めて北海道の室蘭鉄道というところに勤めることにしたんです。夜中に荷役をして働いていた。その後音別という駅からさらに20キロほどの人里のない山奥に入って親方や兄弟子と13人で開墾をはじめました。開墾すると自分の土地になると聞いたものですから。無謀で考えもなしにそんなことをして、ウマにもばかにされて蹴られたりとかしました。ある日、夜中に道に迷って、闇の中で獣の咆哮が聞こえて、闇の怖さ、空間の恐ろしさみたいなものを体験したこともありました。後に横尾忠則さんが、私の作品が持っているひとつの闇のような部分は、そのときに形成されたという、彼らしいことを書いてくれましたが、本当のところはわからない。

### 「いきなりデザインしろと」

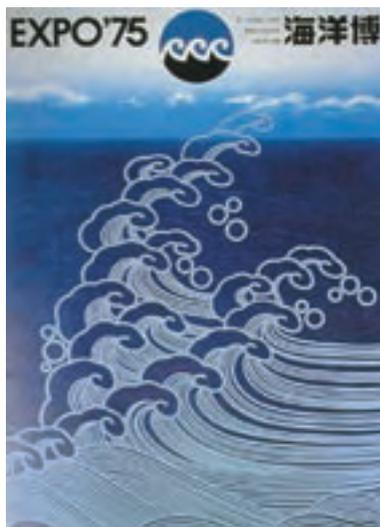
永井：そんなことを体験した頃、父が帰ってきたという知らせを受け、当時一家が住んでいた姫路に呼びもどされて、新制高校の3年生に編入しました。そこでは友達が美術部に入って、僕はそんなに絵が得意でもなかったんですけど、受験勉強も遅れているし他にすることもないので美術部に入ってデッサンをして、そして芸大の彫刻を受験したんです。ところが受験の前に突然左目が見えなくなってしまいました。毛細血管が破れて眼底出血という病気になった。それは栄養失調とか、結核性のものでした。受験には合格したのですが、そのせいで体力のいる塑像は諦めて、2年生のときに休学をして父のいる大阪に戻ったんです。

大阪では父が元いたダイワボウ績という紡績会社で、デザインをやることになった。紡績会社では戦後、宣伝・広告が必要な時代に入ってきたんですね。展示会用の宣伝物やパッケージやポスターを作ったりする人が必要だということで、「永井の息子は芸大に行っていて、病気で帰ってきているけど寝ているほどでもないらしいから、やらせたらどうか」と呼び出されて、いきなりデザインしろとか言われた。僕はデザインなんか全くやっていなかったから本当に困ったんですけど、それでもとにかく自分が考えたものを何とか実現するということをやった。



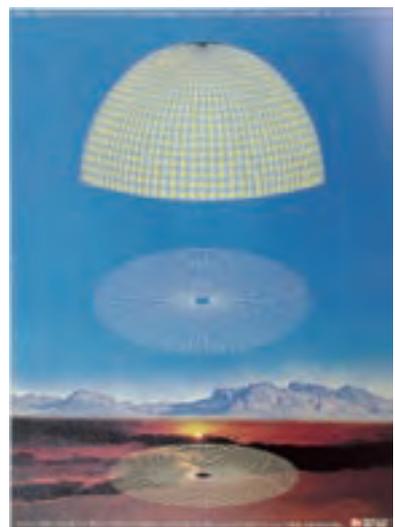
日本のデザイン展覧展(1960)

1960年の世界デザイン会議の関連事業として東京のデパートでおこなわれた日本のデザインの展望を見せた展覧会のポスター。日本的な平面性ということを考えたデザインをしたという。



沖縄海洋博(1972)

大きな海原によって海外から集まってくるカー海外のバビリオンを表現し、北斎などに見られる日本の伝統的な波頭をデザイン化して日本らしさを出したという。



リリーカラー(1974)

壮大な、宇宙の秩序のようなものに迫るという意図で、写真を風景に抽象を描いた心象風景のような作品。すべて定規とコンパスで描かれている。

## 毎晩のようにディスカッションする日々

永井：それで初期の作品が印刷されると何となくそれなりになるもので、プレスアルトという雑誌があったのですが、いきなりこれに載ったんです。当時産経新聞にいた田中一光さんの作品も載っていたため、お互いに面白いことをやったと認め合って、それを主催している人に紹介してもらって2人は会ったんです。その後、木村恒久と片山利弘を含めたこの4人がたまたま会って、本当に毎晩のようにディスカッションをする日々を送りました。自分の作品を持って行くと3人が徹底的に叩くんです。「ちきしょう」と思いつながらもあえてまた持って行って、4畳ぐらいの私の部屋で夜遅くまで議論をして、4人でござ寝してというような日々でした。デザインの研究会「Aクラブ」というのをつくったのもこの頃です。その後間もなく亀倉雄策さんとか河野鷹思さん、原弘さん、早川良雄さんなどが日本宣伝美術会を立ち上げて、23歳ぐらいのときに田中一光さんと一緒に会員になったんです。

亀倉さんたちは1960年の終わりに「21の会」という、毎年21日の日に開く勉強会も主催していたのですが、これにも参加しました。当時、新進の映画監督だった草月の勅使河原宏さんが、安部公房さんと組んで映画を作ったりしていて、羽仁進さんと共に呼んだり、あるいは清家清さんのような建築家を呼んだり。ジャンルを越えた勉強会みたいなことをやっていました。我々はそのころ関西にいたんですけど、夜

汽車で東京に来てさんざん勉強をして、また夜汽車で帰る。大阪まで、座れないときは8時間通路に座って帰るというようなことを繰り返していました。

それから、1960年には世界デザイン会議へとつながったり、また、亀倉雄策、原弘、山城隆一を中心に田中一光とか私とか宇野重喜良、横尾忠則とか、新進のデザイナーが多数集まって日本デザインセンターを立ち上げたんです。ちょうど1960年代というのは、1964年に東京オリンピックがあってこれに対して我々若いデザイナーが総力を上げて取り組んでもいましたし、日本も高度成長にさしかかっている、活気のあった時代だったと思います。

## 作家の個性=企業や美術館などの個性という時代

伊勢：この頃の世の中はデザイナーにとってどんな時代だったのかという話をもう少しお願いします。

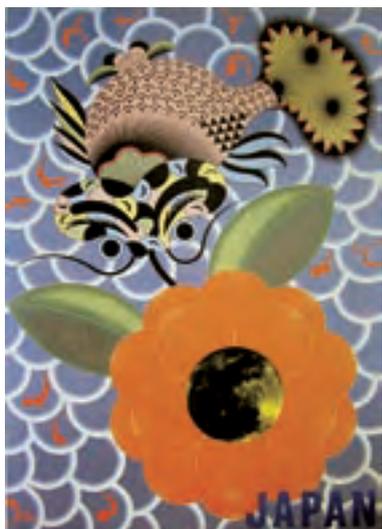
永井：今もデザイン力というものが非常に重要なんだけど、今同様にその企業のブランディングに基本的にデザイナーが立ち合いながら、その企業に一番合ったデザインポリシーを形成しようとする時代でした。今はいわばクライアントの意図に合わせながらその企業、商品を深く読み解き、そのコンセプトにより受け手の共感を考えながらデザインをしていく。ところが当時は、作家の個性が、イコール企業や美術館などの個性になり得た時代だった。つまり他とは違うんだという、自分自身の個性を打ち立てないと、残っていけない時代だった。

た。そして、逆にそれによって日本のデザインは1960年代に世界に認められていた。コスチュームでも三宅一生さんとか山本寛斎さんという人たちも認められたんだけど、それよりちょっと早い時期に日本のグラフィックデザインは世界に認められて世界のあらゆる賞を日本人が獲ったわけです。高度経済成長の時代であり、東京オリンピックをはじめ、札幌冬期オリンピック、大阪万博、沖縄海洋博という国家的なビッグイベントにデザイナーが参加して、そして大企業がようやく広告に目覚めはじめ、デザインというものの独自性や価値を企業が認めだしたという時代背景がある。だからそれぞれの個性が十分に伸ばし切れる時代だったという気がします。

## 「あるときにマンネリ化したのを打破したくなった」

伊勢：永井先生の作品は、デザインを始めた頃の抽象的なパターンから、70年代の放物線状の線によるスタイルへ、そして87年には、動物などの具象的な表現へと変化していますが、それにはどういったきっかけがあったんでしょうか？

永井：やはり破壊のないところに本当の創造はないと思うんです。一見同じようなものでも何かの破壊行為があって、さらにそれを乗り越える自分がいるということが非常に創作に大切です。それがあからさまにスタイルの変遷で変わる人もいれば、一見同じようだけれども内面的な戦いで変化していく人もいますが、私は割合見た目で変わっていったタイプだと思うんです。ある



JAGDAジャパン展(1987)

具象に変わっていった頃の作品。「ジャパン」という日本を紹介するポスター。元来中国から渡ってきたものを日本独自の感性と技術力で日本独特の美へと高めていった日本。その象徴としてランチュウという金魚とツバキの花をテーマにしたという。



永井一正展(1989)

氏の個展のポスター。この頃から「共生」、「共に生きる」ということもモチーフに。動物を組み合わせ、不思議な「心に引っかかるようなもの」を考えていた時代だという。



永井一正展(1991)

今回の講演会のポスターにもなった象。動物のもっている不思議な形や生態というものを特に神秘性を感じさせる象の鼻に象徴的に例えてデザインしたという。

ときに、今までマンネリ化したのを何か打破したいということで、今までやっていなかったものをやろうとした。抽象の時代のポスターには写真を使って生き物というのは、人間を含めて一切出てきていない。ですから、まず生き物というか具象を入れようと思った。それからコンピュータがなかった時代ですからそれまでは複雑なものをすべて定規やコンパスで描いていたんだけど、手描きで直接何かを描くこと、それを自分自身に課したというか。僕なりの方法で、生物のもつ共通性—あらゆる生物が宇宙の摂理のようなものから無縁ではないということも含めて—というものを表現しようとしたのが変な動物です。動物の絵は非常にかわいかったりリアルだったりするものが多いのですが、同時に生き物というのはちょっと不気味であったりユーモラスであったり、あるいは怖かったり、一般概念では括れないものがある。そういう生命体の発するものに少しでも触れることができるといふようなことから、動物を描きながらも作品が変化していった。結局、抽象時代の放射線が向かう先が宇宙だったというのと、心の奥深く向かうのが動物になったということで、心に内在する宇宙として同じことといえば同じことなんです。

## 呼吸のリズムが線に出る

**学生：**作品の中の線の太さが一様でない部分があったりするのとはわざとですか。

**永井：**それはわざとではないですね。コンピュータには可能性も非常にあると思うけど、ただ、例えばコンピューターで0.1ミ

リの線を引くとすると、誰もが全く同じ線になります。ところが一人一人がフリーハンドで描けば、10人いれば10人、100人いれば100人厳格に言えば差異が出ます。それと人間というのは呼吸をしながら生きているから、線を引くときに手で引くと、息を詰めたままずっと引くわけにはいかないから、その呼吸のリズムというものも線に出る。それがちょっと乱れた線にもなるんだけど、ただ受け取る人も呼吸をしながらそれを見るから、非常に正確なものというのは、正確ではあるけれども冷たく感じる。手で描いた線は、ひとつの波長があって暖かく感じる。例えば、江戸小紋という江戸時代の非常に細かい柄があるんだけど、職人さんが全部手で型紙を切っている。あれをコンピュータで全部やると、ああいうふあっとした感じが出ない。冷たい形になってしまう。ですからそういう手の良さや手で描くということも、忘れないでほしい。その呼吸をいかにコンピュータに転用していくかというように、たぶん必要だと思う。

## 飢餓感がものを創る原動力

**学生：**先生は戦争という灰色の背景がある時代を生きてこられました。モノのあふれている、満たされている私たちに、どういう気持ちをお持ちですか。

**永井：**いや、うらやましいです(笑)。青春時代が皆さんみたいに豊かな時代に育っていれば、それは本当にうらやましい。ただ、ものを作るというのは非常に満足し、例えば美味しいものをたくさん食べてうっ

とりしているときに、何かを必死に創るということはあまりないですね。ある意味の飢餓感みたいなものが、ものを作る原動力になっているんです。幸せですべてに満足であれば、別にものなんて作る必要がない。創作というのは生まれない。だから自分の飢餓感というか、実際的には食べ物の飢えじゃなくても、心の飢えも含めて、そういうものを満たそうとして創作というものは生まれるわけです。だから、今別に食べ物に困るわけではないけど、やはりそれぞれが悩みがあると思う。それは恋愛の悩みだったり他の悩みだったり、いろいろ今の時代だってそれぞれが抱えているわけだから、その悩みというものを直視しながら、それを糧として作品は生まれると僕は思います。

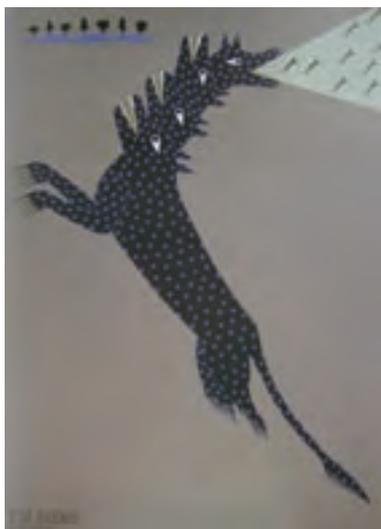
(文：広報課 林 亜紀子)



会場は満員。床に座って話を聞く学生たち。

## 永井一正 (ながい かずまさ)

1929年大阪生まれ。1960年日本デザインセンター創立に参加、現在、最高顧問。JAGDA理事。AGI会員。1960年以後、日宣美会員賞、朝日広告賞、東京国際版画ビエンナーレ東京国立近代美術館賞、東京 ADC グランプリ、毎日デザイン賞、毎日芸術賞、芸術選奨文部大臣賞、通産大臣デザイン功労賞、亀倉雄策賞、勝負勝賞、ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ金賞、プルノ、モスクワ、ヘルシンキ、ザグレブ、ウクライナ、ホンコンの国際展でグランプリを受賞。紫綬褒章、勲四等旭日小綬章受章。



I'M HERE (1992)

「I'M HERE」という環境ポスターの一種。森が破壊され、砂漠化し、住むところが少なくなっている狼がモチーフ。



save nature (1995)

荒涼とした岩山のようなところにいるサル。白いサルによって白というものの神秘性を表現。下の方からロットリングしていき、上の方は遠近的に少し細かく描いてある。「3分の2ぐらいになったらだんだんだんだん描くのが嫌になって、なんでこんなもの始めたんだろう、と後悔しながら途中でやめるわけにもいかずに描いた。」と永井先生。この時代は出勤前に、朝の4時ぐらいに起きて描いていたという。



SAVE (1998)

正面から見たリアルな動物の顔を上に描き、中の方は正反対に素朴な子どものような線で描こうとしたもの。そのために左手で描いてみて満足のいくものになったという。

## NEWS ● 4 森啓客員教授が第5回佐藤敬之輔賞を受賞

このたび特定非営利活動法人（NPO）日本タイポグラフィ協会顕彰「第5回佐藤敬之輔賞」受賞者が発表され、本学大学院美術研究科客員教授の森啓先生が第5回佐藤敬之輔賞を受賞されました。

■ NPO 法人日本タイポグラフィ協会顕彰「佐藤敬之輔賞」について

日本タイポグラフィ協会は、日本レタリングデザイナー協会を母体として、1964年任意団体として発足したものです。協会はタイポグラフィ活動に終始していましたが、2001年、NPO 法人の認証を受け、公益法人として社会活動を一層強めてきました。佐藤敬之輔賞は、はじめての記念事業として設置されました。佐藤氏は協会発足時からタイポグラフィに関して多くの革新的な提言、発言、研究発表、デザイン教育等、オールラウンドに及び活躍を続け、タイポグラフィの基盤に少なからず影響を与えたことは、多くの人々が知るところです。タイポグラフィの重要性、科学性をアピールするものとして、またここに佐藤氏の溢れる情熱を思い起こすために賞名と定められました。

選考基準：文字文化を多角的視点でとらえ、タイポグラフィの基礎研究から、創作活動まで、文字に関わるエモーショナルな行為に対して。

選考委員：桑山弥三郎 羽原鼎郎 吉田市郎  
太田徹也 篠原栄太



活字をモチーフした盾



### 森 啓(もり けい)

経歴  
1935年 東京生まれ  
1962年 日本大学芸術学部美術学科 卒  
1963-1969年 東京デザイン研究所 講師 武蔵野美術大学造形学部 講師  
1971-2000年 日本エディタースクール 講師  
1978-1990年 千葉大学工学部画像応用工学 講師  
1992-2000年 明星大学日本文化学部 教授  
2001-2005年 女子美術大学大学院 客員教授  
現在 女子美術大学大学院 客員教授  
1960年よりグラフィックデザイナー  
1971年より森啓デザイン研究室を主宰  
1971-1993年 科学誌「日経サイエンス」のアートディレクター  
1972-1993年 三菱製紙株式会社印刷用紙見本板 アートディレクション  
1972-1978年 大日本印刷株式会社スベシメンブック「写真雑学」執筆・デザイン  
1980年 株式会社竹尾 60周年記念出版「世界の字遣紙」アートディレクション  
1983年「リョービ書体スベシメンブック」編集制作・アートディレクション  
1983-1994年 リョービマジックス「アスタ」誌 編集・アートディレクション  
研究領域・研究内容 グラフィックデザイン史、出版デザイン史、印刷技術史、書体設計、タイポグラフィ。  
研究業績  
主な著作 「写植教室」（共著）日本印刷新聞社 1965年  
「戦後グラフィックデザイン私史」風土社版現代デザイン講座 1971年  
「世界デザイン史」（共著）美術出版社 1996年  
「活版印刷技術調査報告書」青柳市教育委員会発行 2001年・改訂版  
2003年の執筆に対して、日本出版学会賞特別賞（2003年度）を受賞。  
2004年秋 女子美術大学アートミュージアムにおいて、「タイポグラフィ・タイプフェイスのいま、デジタル時代の印刷文学」展覧会をプロデュース。「図録」を同年秋に執筆「会誌録」を2005年春執筆・公刊。  
2005年3月から2006年3月まで、東京大学大学院情報学環所蔵の「第一次大戦期戦争ポスター」の版式調査を、新しく選出したメンバーと共に共同調査。同年3月に、上記ポスターの「カタログ・レゾネ」を同大学院情報学環吉見研究室より公刊。

## NEWS ● 5 特別講義のお知らせ 講師：森 啓(女子美術大学大学院 客員教授)

### デザインの自律性を取りもどすための提言-デザイン原論-

2006年度、本学大学院博士後期課程では森啓客員教授による特別講義を7回に渡っておこなっています。第1回目では「衣・食・住」、2回目では「色と光」、3回目では「人力とクルマ」をテーマに、既に3回目までの講義が終了しています。女子美生に限らず、学外からも一般の方々や教員まで幅広い層が受講しています。グラフィックデザイナーである森啓教授の研究領域はグラフィックデザイン史、出版デザイン史、印刷技術史、書体設計、タイポグラフィに渡ります。皆さんもぜひ、この機会に大学院の講義を受けてみてはいかがでしょうか？ 残る4回の講義日程と講義内容等は右記になります。学内で配布されているチラシや女子美ウェブサイトにも情報が載っておりますので、ご確認ください。

日程：9/26(火) 「物語の成立」  
10/17(火) 「空間を意識する力」  
11/24(金) 「手と手仕事」  
12/19(火) 「個と多数」  
時間：16:40～18:10 (90分)  
場所：女子美術大学相模原キャンパス  
2号館222番教室



デザインの自律性を取りもどすための提言  
デザイン原論  
JOSHIBI UNIVERSITY of ART and DESIGN  
**森啓**

<p>2006年度 女子美術大学 大学院美術研究科 博士後期課程 特別講義（一般公開）</p> <p>期 日 16:40～18:10 (90分)</p> <p>第 1 回 9/26(火) 10/17(火) 第 2 回 11/24(金) 12/19(火)</p> <p>講 師 森 啓 (女子美術大学大学院 客員教授)</p> <p>主 催 女子美術大学 大学院美術研究科 博士後期課程 共 催 日本出版学会 印刷技術調査報告書編集委員会 後 援 日本印刷新聞社 東京大学大学院情報学環 お問い合わせ先 森啓先生 0428-258-1111 URL http://www.joshida.ac.jp/~artdesign/kenki/</p>	<p>期 日 9,26 tue 10,17 tue</p> <p>期 日 11,24 fri 12,19 tue</p>
--	--

ポスター作成：林規章(芸術学部デザイン学科専任講師)

## NEWS ● ⑥ 活字文化フェスタ2006 報告

「活字」をテーマに地域を越えた子どもの居場所づくり、個別課題を越えた大人のネットワークづくりを目指そうと杉並区の地域団体、大学、公共施設などが協力し合い「活字文化フェスタ2006」が開催されました。第三会場となった女子美にも多くの人が活字に親しみに訪れました。ギャラリーニケでは学生作品の展示・上映、活字の展示、女子美卒業生・絵本作家の本など

のコーナーが設けられ、訪れた人々の目を楽しませていました。また、ペーパー版画や新熟語辞書作りのコーナーでは実際にものづくりが体験でき人気を集めていました。事前に応募で集められた、新熟語はどれも捻りの利いた面白いものばかりで、あらかじめ葉書に印刷されたそれらの熟語の中から気に入ったものをいくつか選び、簡易製本で本の形態に綴り、持ち帰ることが

できました。また4号館にある活版活字工房も一般に公開しており、実際に活字を拾い、組み、印刷するという作業が行われていました。パソコンを打てばすぐに画面に文字が出てくる時代に生まれた子どもたちにとって、活字を拾い集めるという行為はどのように映ったでしょうか。3月24日のこの日、まさに「読む・聞く・書く・創る」を楽しむという内容のフェスタでした。



新熟語の数々



自分だけの辞書を制作中



紙を剥がしたり切ったり重ねたりしたものをスキャンしパソコン上で加工し出力するペーパー版画



活字を拾う作業

## Topics ● ② 女子美オープンキャンパス2006

7月16～17日、オープンキャンパスが杉並・相模原の両キャンパスで開催されました。受験生や地域住民の方々など、合わせて2634名もの参加があり、学内は大変

賑やかな2日間になりました。各学科の研究室が企画した毎年大人気の“ワークショップ”をはじめ、卒業生による講演会・デッサン基礎講座・先輩相談コーナー等の新

企画も加わり、訪れた参加者は女子美で体感する「モノ作りの楽しさ」を満喫していたようです。





株式会社サンリオ（以下サンリオ）の大人気キャラクター「シナモン」の生みの親であるキャラクターデザイナーの奥村心雪さんは本学短期大学造形情報デザイン専攻（現短期大学部造形学科）の卒業生です。4月12日に主に芸術学部、短期大学の1年生を対象におこなった就職セミナーでは奥村さんにサンリオでの仕事や就職活動について講演していただいた後、短期大学部2年生の松本枝里子さんからのインタビューに答えていただきました。

## デビューするキャラクターは年に1つか2つ

奥村さんの仕事は大きく分けて、新キャラクターの開発、既存のキャラクターのデザインリニューアル、ギフト商品のデザインワークの3つだそう。新キャラクターの開発はどんなプロセスを経るのか。

「キャラクター制作部の社員全員が2、3ヶ月に1度必ず新キャラクターを作って会社に提出することになっています。そのうちいいものを部内で7点から10点くらいに絞って、サンリオショップでお客様からアンケートを取ります。そして顧客の反応がいいものがデビューします。」

## 基本はキャラクター商品が大好きなこと

キャラクター制作部に入れば自分でオリジナルのキャラクターを制作するだけでなく、様々なキャラクターの様々なポーズを描く仕事を中心になる。キャラクターのポーズを動かすことができるデッサン力があるかどうか採用試験で見られるポイントだ。また、商品デザインのための色彩感覚や、流行に敏感であること、グループで仕

事をしていく上でコミュニケーション能力が高い点も重要だという。

「もちろん基本は、キャラクター商品が大好きなこと、キャラクターを創りたい意志が強いかどうかは重要です。好きじゃないとしんどいとも思います。学生時代にどれだけ幅広く様々なことに触れているかが、これらのことにすべて関わってくると思います。」

## ～在学生が聞く～

**松本:** シナモンの誕生までを教えてください。

**奥村:** 入社2年目のときにウサギのキャラクターを描いて提出しましたが、部内の選考で落とされました。ただ、このときに上司（ハローキティのデザイナーで本学卒業生の山口裕子さん）から前向きなコメントをいただいたんです。それで機会があったらまた出そうと思っていました。3年目のときに「いちご新聞」誌上で「New Character Debut」という企画がありまして、ウサギのキャラクターを出すことにしました。このときに、チワワやミニチュアダックスがはやっていたので、ウサギより犬の方が親しまれるかもしれないと思いついて、犬に変えました。最初は柴犬のイメージでした。

**松本:** キャラクター設定はどのようにされたんですか。

**奥村:** キャラクターの設定も作者が考えてよいことになっているのですが、私はデビューが決まってから企画の人とどんな商品にするか話し合ってからキャラクターのバックグラウンドを決めました。世はカフェブームだったこともあって、小さな女の子も大人の女性が行くカフェに憧れるのではないかなと思ったんです。それでシナモンという空から落ちてきた犬がおいしいシナモンロールに誘われてカフェに行く…という設定にしました。サンリオピューロランドにもシナモンが住むカフェ・シナモンをイメージした飲食施設が作られています。

**松本:** シナモンに対して今はどんな思い入れがありますか。

**奥村:** サンリオのキャラクターは5年が寿命と言われます。節目なのでこれを乗り切ってキティやマイメロディのように生き残り、長く続くキャラクターにしていきたいです。子どものときにシナモンが好きだった



奥村さんのデザインした「シナモン」

た人が大人になったときに子どもに持たせてくれたりするといいですね。

**松本:** 就職のことはいつ頃から意識されていたんでしょう。

**奥村:** 女子美に入学する前から「サンリオに入りたい」という夢があったのでいつも小さなメモ帳を持ち歩いて思いついたらキャラクターの落書きをするということをしていました。

**松本:** サンリオに入るために女子美でやっていたことはありますか。

**奥村:** やはり大学時代もキャラクターの落書きを描いてストックしていましたが、授業の課題をやるのも好きだったのでいつも全力投球していました。作品制作を手書きで描いていたことでデッサン力がかなりついたことも入社に役立ちました。サンリオの入社の課題に対しては、準備に1ヵ月くらい費やしました。採用試験は6月にはじまって、内定までには8月のお盆明けくらいまでかかりました。私はファイルを2冊、学校の課題を載せたファイルを1冊と、サンリオ用に作ったファイルを1冊もっていました。

**松本:** 学生へのアドバイスがありましたらお聞かせください。

**奥村:** 短大とはいえ学生時代はやはり時間があると思うんです。学校でしかできないことをがんばるべきです。私はバイトもせずに授業をがんばっていました。それから学校の授業に限らず情報はいろいろなところにありますから映画を観たり美術館に足を運んだり、アンテナを常に張っておくことです。

## Topics ● ④ 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2006

7月23日から9月10日の50日間、新潟県の越後妻有（十日町市と津南町）でおよそ760kmにおよぶ大地に45カ国のアーティストによる330を超える作品が展示される「大地の芸術祭」がおこなわれました。過疎化と高齢化、農業の低迷、地域活力の低下が進むこの地域でアートの力による地域再生を目指しておこなわれるこの大プロジェクトの総合ディレクターは本学芸術学科の北川フラム教授。そしてイベントの準備・運営、アーティストの作品制作を手伝うのは「こへび隊」と呼ばれるサポーターです。地域づくりが、地元住民だけでなく、地域・世代・ジャンルを越えた人々の協働によって行われるというのが数あるこのイベントの魅力のひとつです。本学からも芸術学科を中心に多くの学生が参加しました。

本学からの出品作家としては、ファッション造形学科の眞田岳彦助教授が「越後の布」プロジェクトで布や織を展示した他、「アンギン体験」ワークショップの実施や「越後の衣服」キモノファッションショーの演出を担当。芸術学科の仙石克己教授は芸術学科の学生とともに「時の投影—大地から」という金属オブジェを棚田の跡地に林立させました。

また、芸術学科ではイベントの来訪者や住民へアンケート調査をすることによって「21世紀のアートの方向と展開」と題した研究プロジェクトを実施中です。場に即したアートが、住民やサポーターとの協働の中でどのように成立するのか、作品がどのように住民や来訪者に受容されるかについての調査研究で、12月には成果発表とシンポジウムも予定されています。



大地の芸術祭のポスター

## Topics ● ⑤ はっぱプロジェクト —相模原市立博物館とのコラボレーション—

相模原市立博物館で2006年の夏に開催した、新「相模原市」誕生記念夏季企画展「はっぱはくぶつかん—緑の相模原」の企画・展示の一部を、メディアアート学科の3年生12名からなる「はっぱプロジェクトチーム」が担当し、博物館の学芸員と協力してデザインと制作を行いました。この企画展は7月15日(土)から9月3日(日)まで、44日間にわたって開催され、夏休み期間中の展示ということもあって、たくさんのお客さんで賑わいました。

この展示の中で「はっぱプロジェクトチーム」が制作した部分は、ロゴデザイン、イメージキャラクターデザイン、ポスターとちらしのデザイン、ノベルティのうちわ

のデザイン、円筒型映像の制作、導入部の空間デザイン、「光合成のしくみ」のアニメーション制作、マグネットを使ったパズルの制作、FLASHによるコンピュータゲーム、「こもれび」を体験する空間演出、子ども向けワークショップの実施です。多彩なジャンルにわたって女子美生のアートとデザインを活かすことができました。

企画展を担当した博物館の秋山幸也学芸員（植物担当）からは、「はっぱプロジェクトチームのみなさんは、学生というよりも、すでに立派なクリエイター。こちらの要求を超えるアイデアをしっかりと出して実現し、子ども達の歓声が響く展示空間ができました。」とのお話をいただきました。

（芸術学部メディアアート学科教授 羽太 謙一）



準備風景



ワークショップの様子

## Topics ● ⑥ 第29回 学生設計優秀作品 —建築・都市・環境—

5月29日～6月1日、明治大学駿河台校舎「アカデミーコモン」にて、第29回学生設計優秀作品展が行なわれました。同作品展は大学及び専門学校 51校75学科、大学院（修士）15校17研究室の参加を得て出品・展示されたものです。本学からは芸術学部デザイン学科EDコースの高橋香菜子さんが卒業制作作品「Bunka-Mura Mid Hill」を出品しました。

「Bunka-Mura Mid Hill」は、渋谷の中で

文化が隣り合わせにひしめき合い、欲望を満たすだけの機能が集約されているエリアを“文化の村”と位置付け、ぽっかりと白い丘の広場をデザインし、丘に一筋の裂け目をいれ、そこから波紋の様に光が広がり、複雑で繊細な空間を作り出した作品です。

この展覧会は、卒業設計の優秀作品を一同に集めて開催されたものです。



「Bunka Mura Mid Hill」  
高橋 香菜子（芸術学部デザイン学科卒）

## Topics ● 7 スポーツフェスタ開催

5月20日(日)、相模原キャンパスのグラウンドにてスポーツフェスタが開催されました。当日は快晴の中、学科・専攻ごとに色分けされたユニフォームを着用し、玉入れや障害物競走、大縄跳びやリレーなどを

おこないました。各競技には教職員も参加し、大いに盛り上がりました。また、途中で各チームによる応援合戦もあり、各学科・専攻とも工夫を凝らした演出に会場からは大きな拍手が起こりました。

日ごろの運動不足を解消すべく、学生のみなさんは日焼けを気にしつつも頭にタオルを巻いた格好で、イキイキと競技に参加しているようでした。



## Topics ● 8 完全ミイラ「セヌウ」復顔プロジェクト

メディアアート学科エジプト研究プロジェクトチームは、早稲田大学古代エジプト調査隊によって発見された完全ミイラ「セヌウ」のCTスキャン画像を元に、エジプト学は早稲田大学古代エジプト調査隊の吉村作治教授、解剖学は聖マリアンナ医科大学解剖学教室の平田和明教授の協力を得て、コンピュータグラフィックス (CG) による復顔を行いました。

制作は、まず頭蓋骨のCTスキャン画像を元に解剖学的な観点から計測点を付け、性別、人種、年齢などの人類学的平均測深値データを使用し、基本的な面皮を作成しました。そして、エジプト学からみた観点から鼻、唇、耳などの形状を絞り込み、3DCGで最終的な形状を作り出し、皮膚はエジプト人の皮膚画像を使用し、「セヌウ」という人物像を考慮しながら美的感性により制作を行い最終的な完成に導きました。エジプト学、解剖学、メディアアートのコラボレーションは、コミュニケーションが難しく様々な困難が伴いましたが、プロジェクトが進むに従ってお互いの理解度が増し、最終的に復顔が完成した時には、これまでにない達成感があり、非常に意義

深い試みだったと思います。7月末からボストン (アメリカ) で開催された世界的なコンファレンス SIGGPAH2006で発表されたことから、研究者が領域を超えて新しい研究のためのコミュニケーションを続けていくことが、国際的にも文化的にも重要であることが伺えます。

この復顔の成果は、「吉村作治の早大エジプト発掘40年展」福岡市博物館 (福岡：2006年7月14日(金)～9月3日(日)) にも展示されました。この展示会は、早稲田大学の吉村作治先生と早稲田大学エジプト調査隊が、40年間に渡ってエジプトで発掘されてきた世界初公開の貴重なエジプトの遺物を見ることができる展示会です。ピラミッドの頂点に載る貴重なピラミディオンをはじめ数千年前のエジプトの文明を感じることができます。そして今回、女子美が復顔を制作した未盗掘・完全ミイラ「セヌウ」の美しい青いミイラマスクと木官も展示されています。

この展示会は、福岡の後、「えき」美術館 KYOTO (京都：2006年10月7日(土)～11月26日(日))、長崎県美術館 (長崎：2006年12月22日(金)～2007年2月14

日(日))、岡山オリент美術館 (岡山：2007年3月17日(土)～5月13日(日)) など、2年間に渡り日本各地を巡回する予定です。ぜひ、展示会に足を運んで頂き、貴重なエジプトの遺物とメディアアート学科の成果を見ていただきたいと思います。

(芸術学部メディアアート学科教授 内山 博子)



「セヌウ」の復顔の画像



福岡市博物館でおこなわれた「吉村作治の早大エジプト発掘40年展」

## Interview ● 研究員 李元求教授インタビュー

昨年9月本学では初めて、海外からの研究員として視覚デザインの研究をされている李元求（イ・ウォング）教授をお迎えしました。女子美で一年間の研究をされ、帰国を間近に控えた7月に、李先生の研究成果を一堂に紹介する展示会を女子美アートミュージアムで開催しました。

李先生は、韓国の湖西（ホソ）大学校視覚デザイン科で教鞭をとられ、大学では多くの学生を広告関係の公募展受賞へと導き、後進のデザイナーの育成にも力を注がれてきました。人の持つ想像力ということに深い関心を持たれ「想像力を最も豊かに育てるには、より幼い頃からの美術教育が非常に大切」と考え、子供達の想像力を育む美術の教材を多数研究開発してこられました。今回の展示会では、先生の開発された美術の教材の展示だけでなく、日本の子供達とのワークショップも開催しました。

#### —現在の研究をするようになったきっかけはなんだったのでしょうか？

1986年から大学で、広告デザインを教えています。ソウル大学で学生の潜在的な「想像力」を引き出すにはどうしたら良いかを考えるようになりました。ソウル大学の学生は頭脳明晰なのである程度教員が指導すると簡単に理解し制作をします。しかし学生達はある時点から、みんな自由な発想ができない。彼らなら自分の研究の材料になると思っていましたが、難しいことがわかりました。そんな時、既成概念や先入観のない子供の頃から教育したら、もっと有効的かもしれないと思ったんです。実際、実験的にその教材を作って、大学生と子供に同じことをさせた時に、その差が歴然としました。子供達の驚異的な無限の「想像力」に圧倒されました。



#### —現在教鞭をとられている湖西（ホソ）大学はどんな大学なのですか？

まだ歴史も短い地方大学です。少し前までは韓国でも無名の大学でした。しかし、私が学生達を指導するようになってから変わりました。私の学科の学生達が韓国の広告デザインの公募展で10年間毎年グランプリを獲るようになり、それが新聞社に大きく取上げられるや、一躍、グラフィックデザインではNo.1と呼ばれるようになりました。今では韓国を代表するデザインで有名な大学です。しかも、その10年間の賞金が1000万円にもなりました。現在はその賞金を学生達の奨学金に充てています。お金持ちが寄付したお金でなく、学生達が生み出した賞金を奨学金にするというのはとても意味のある使い方です。

#### —研究機関として女子美を選ばれたきっかけは？

日本の新聞社の文化部の記者達から日本の様々な美術大学の話を聞く機会があったのがきっかけです。話を聞くまでは正直、女子美のことは全然知りませんでした。やはり、なんと言っても純粋な美大で長い歴史があるということに強く惹かれました。しかも、韓国で有名な女性の画家や教育者がみんな女子美の卒業生だということを知りました。驚くことに韓国で一番最初(88年前)に洋画を学んだ女性が女子美出身の方なんです。そんなことから、女子美に行こうと決めました。

#### —女子美の印象はどうでしたか？

キャンパスが近代的なのでびっくりしました。私は100年以上の歴史がある大学なので、さぞかし古い建築の残った大学なのだろうと想像しておりました。少し残念でした。(笑)



子供の想像力開発のためのドローイング教材



最初に感銘を受けたのは、学生に対して愛情と関心をもって指導する先生方の姿勢です。韓国では先生は地位が非常に高く、常に上段に構え、学生と同じところに下りていきません。学生と教授の間に非常に距離がある。また、特にデザイン系では、教授はピシッとネクタイを締めて授業に出ますしね。女子美では学生と先生がよい意味で友達感覚であり、そこは非常に良いと思います。課題の作品講評にしても女子美では先生が一人一人の学生に丁寧に講評します。韓国では一番いい作品とよくない作品を講評しておしまい。私は今まで教えてきた韓国の学生達に対して申し訳ないと思いました。私も韓国に帰ったらネクタイを緩め、学生達との距離を縮めてみようと思います。

また、学生達の作品について、私は固定観念から女子美だったら女性らしい作品ばかりを想像していましたが、実際に見たらそうではなかった。共学の大学の女性の作品よりも男らしい作品も結構ありました。特にデザインよりは洋画の方で強く感じましたね。



# Interview

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

—今回、日本でワークショップを実施して  
みて日本の子供達と韓国の子供達との違い  
はありましたか？

韓国の子供達より、日本の子供達の方  
がより自由な表現をするように感じまし  
た。私が2年前に創った「子供美術館」で  
教材を使って絵を描いている韓国の子供  
達は、経済的に裕福な家庭の子供です。それ  
故エリートのお母さんやお父さんが子供達  
に「あしなさい。こうしなさい」と教育  
熱心で煩く口を出すんです。そうすると必  
然的に、子供はどうすればお母さんに誉め  
てもらえるか考え、自由に描くのではなく、  
親の顔色を見て描く。今回日本ではエリー  
トの子供達だけを集めたわけではないから、  
自由にのびのび描いているように思えたの  
かもしれませんね。実は子供達よりも親の  
教育が大切なんです。親がいろいろと口を  
出すことに対して、子供が親の言うことを  
聞かずにモノを作ってしまう。私の作っ  
ているのはそんな固定概念を壊すことを誘  
発させる教材です。実は親のための教材  
であったりもします（笑）。この教材の半  
分以上が子供達からのアイデアからヒント  
を得て作られたものです。子供には非常  
に優れ

た能力があります。なので、親にも子供  
から教わってほしい。この教材を使って  
子供が絵を描いたら、何を描いてもまず  
親が誉めてあげることが大事です。そし  
て、どうやってそのアイデアを出したの  
かを子供と一緒に考える。それが一番大  
事なこと。どうすれば絵をうまく描ける  
かなんてことはその後の問題ですよ。こ  
の教材は絵がうまく描けるようになるた  
めの教材ではなく、子供が自分の持つて  
いる想像力をいかに表現することができる  
かを考えて作られたもので、発想を通  
して、モノの見方、考え方を柔軟にす  
ることが目的です。

最後に李先生より、女子美のみなさん  
には心から感謝の気持ち伝えたい。韓  
国へ帰ってからも女子美のことをたく  
さん紹介し韓国と日本の交流の掛け  
橋にしていきたい、との有り難いメ  
ッセージもいただきました。

インタビュー協力：芸術学部絵画学科  
洋画専攻教授 稲田美乃里  
通訳協力：大学院美術研究科博士後期課程  
美術専攻1年 安 美子

(インタビュー・文 広報課 三ツ木知昭)

## 李元求 (イ・ウォング)

1947韓国忠清北道清州に生まれる。'65-71弘  
益大学校美術大学視覚デザイン科に学ぶ。'79-  
82弘益大学校美術大学産業美術大学院広告デ  
ザイン科に学ぶ。'83-92弘益大学校美術大学視  
覚デザイン科で教える。'87-05湖西大学校芸術  
大学視覚デザイン科で教える。'98-05ソウル大  
学校美術大学視覚デザイン科で教える。

1972-78ソウル薬品(株)広報室長。'79-86大熊  
製薬(株)広告部長。'87-03大教グループ広告デ  
ザイン諮問教授。'88-90韓国グラフィックデザ  
イン協会副会長。'97-99韓国美術家協会デザ  
イン分科委員長。'99-00ソウル特別市建築装  
飾物審議委員。'00-05朝日広告賞(朝鮮日報)審  
査委員。'01-02韓国デザイン大展審査委員  
2006現在 湖西大学校芸術大学 教授  
THINKTHINK 子供の美術館 館長

(著書)

広告クムトル1。(商品広告の発想)  
広告クムトル2。(企業広告の発想)  
広告クムトル3。(広告デザインの製作)

子供の想像力開発のためのドローイング教材42  
冊(韓国特許登録11件。ドイツ、フランス、イ  
ギリス、ニュージーランド特許登録)



〈展覧会図録〉



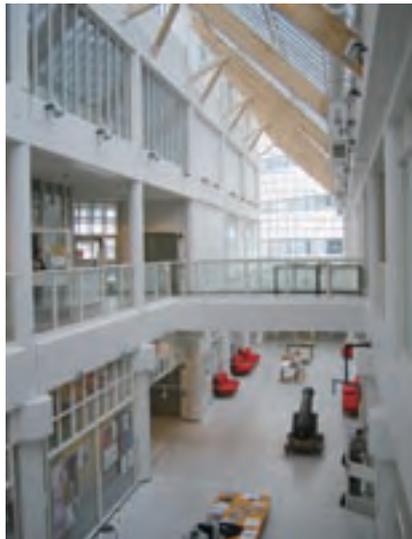
考える公園\*子供の想像力開発のためのドローイング教材展\*



実際にこの教材を使って子供たちが制作した作品

## エブテク応用科学大学アート・デザイン学院 (フィンランド) との学術交流協定締結

2006年6月7日付で大学と短期大学部はフィンランドのエブテク応用科学大学アート・デザイン学院 (Institute of Art and Design, EVTEK University of Applied Sciences、以下 EVTEK という) との間で学術交流協定を締結しました。



校舎のエントランス

2005年5月に EVTEK 教員と学生10名が本学を訪問し、教職員や学生と懇談しました。その中で両大学は、美術・デザイン領域では国際交流の意義は大きく、異なる社会や文化を尊重しながら相互理解を深めることは非常に重要であるとの認識で一致しました。同年10月には本学教職員が EVTEK を訪問。マイサ・フーカ学院長 (エブテク応用科学大学副学長兼務) から当地の教育研究活動状況の説明を受け、同学院は本学との交流に適した環境と水準を維持していることが確認されました。

この協定は、両大学が共有する学術的関心を様々な形で発展させていくことを目的としており、学生・教職員・研究者・学術情報資料の相互交流、共同研究、国際会議への参加支援などの活動が含まれています。本学学生の間ではフィンランドは留学希望国上位にランクされる魅力溢れる国であり、同時に、EVTEK 学生の間では日本への留学人気は高まってきています。まずは学生交流を中心とした活動を展開していきます。

EVTEK はエブテク応用科学大学 (創立1984年) の一学部として位置づけられています。大学には EVTEK の他にエブテク工科学院、エブテク経営管理スクールが

あり、3学部ともかなり高い自治性のもとに運営されています。大学全体の学生数は5,200名に上り、世界50カ国から270名の留学生が学習しています。EVTEK では学士課程に450名の学生が在籍し、メディア学科、デザイン学科、保存修復学科の3学科で構成されています。メディア学科はグラフィックデザインコースと3D視覚表現コースの2コースに分かれ、デザイン学科にはテキスタイルデザインコースとファッションデザインコースの2コースがあります。保存修復学科はフィンランド国内の教育研究機関の中で最も充実していると言われ、4年に一度しか学生をとらないユニークな教育スタイルをとっています。立体芸術修復コース、家具修復コース、イーゼル絵画修復コース、紙修復コース、テキスタイル修復コース、インテリア修復コースの6コースを擁しています。全学科と



テキスタイルデザイン教室

もフィンランド語による授業が基本で、正規留学生には高度なフィンランド語力が要求されます。しかし、交換留学生の履修については、履修可能科目は英語でも授業が行われるので、ある程度以上の英語力があれば全く問題はないとされています。

フィンランドの美術デザイン高等教育は卒業後の就職での実践性を強く意識した性格を持っています。EVTEK では大学内のエブテク経営管理スクールを有効活用し、



ファッションデザイン教室



保存修復教室

ビジネス界の知識や行動様式を身につけたデザイナーの育成を目標に掲げています。必修科目である「インターンシップ」、「ビジネス原論」、「ビジネスプランニング」、「成功するマーケティング」は同スクールとの連携により生み出されたものであり、保存修復学科の学生さえも履修します。ファッションデザインコースでは、学生の卒業制作作品を企業が評価し、商品化して市場に流通させることも頻繁にあるそうです。

キャンパスがあるヴァンターはフィンランドの首都ヘルシンキの北東に隣接する国内4位の街 (人口20万人) で、その街の名を冠した国際空港はフィンランドの空の玄関口として有名です。キャンパス最寄駅とヘルシンキ中央駅の間は15分程度で気軽に往来でき、隣接するエスポー、カウニアイネンとともに首都圏を構成しています。

この協定の締結により、本学の学術交流協定大学は広州美術学院 (中国)、セントラル・イングランド大学パーミンガム/パーミンガム・アート・デザイン学院 (イギリス) とあわせ3大学となりました。

(国際交流センター 下田 明)



ヘルシンキの街並み

## Topics ● 10 バーミンガムから3名の学生が短期留学

今年も英国バーミンガム・アート・デザイン学院短期外国人留学生受入プログラムが実施され、2006年6月26日から7月24日までの4週間、シャーロット・マシヤンさん、ジェンマ・ガーナーさん、クワン・ウォンさんの3名が本学の授業に参加しました。シャーロットさんはデザイン学科でポスターデザイン、ジェンマさんは同学科でパッケージ・デザイン、クワンさんはファッション造形学科で浴衣制作に取り組みました。3人とも日本人学生とともに資料収集・実地調査、プレゼンテーション、工房見学など意欲的に課題制作に取り組み、また、授業以外でも積極的に学生交流を行いました。

以下にクワンさんの感想を記します。

日本はとても美しい国です。建造物や芸術作品だけでなく、住居やスーパーマーケットで売られている商品の包装までも美しく、日本人は自然環境に対して洗練された感覚を持ち、さらに線・形・色に対してとても豊かな感性を持っていると思いました。

女子美で過ごした4週間は、イギリスではできない貴重な体験をさせてもらい、興味深いことの連続でした。ファッション造形学科では先生に教わりながら浴衣制作に取り組みました。また、他の学科を見学して紙漉きや日本画も教わりました。言葉の壁はありましたが、それ以上に、東洋と西洋の文化の価値を見出せたことで得るものは大きかったです。

最後に、私を歓迎してくれ、優しく接してくれたすべての人に言いたい。

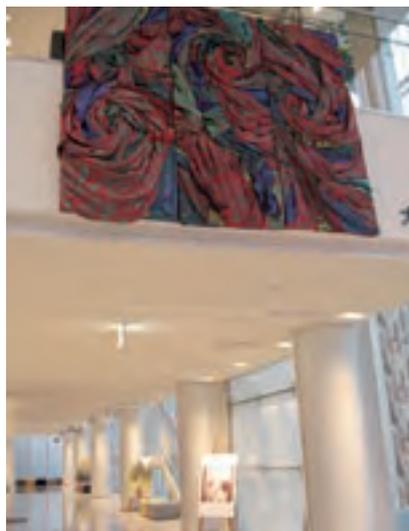
“オセワニナリマシタ” “アリガトウゴザイマシタ”



ピザパーティの様子

## Topics ● 11 エデュケーション・フェスティバル in 杉並

杉並区の音楽・ダンス・演劇の公演を目的とした施設「杉並公会堂」が今年6月にオープンしました。この杉並公会堂のオープニング記念事業の一環として8月18日(金)～20日(日)の3日間、杉並区・日本フィルハーモニー交響楽団・子ども文化NPO M.A.T主催による“エデュケーション・フェスティバル in 杉並”が杉並公会堂で開催されました。今回、本学もこの事業に協力し、会場内に絵画・写真・テキスタイル・ファッションなどく耳で聞いて>>身体で表現して>><リズムをとって>><目で楽しみ質感を感じる>人間本来の五感を生かした約100点の学生作品を展示しました。



## Topics ● 12 教育フォーラム2006開催

今回で7回目を迎える教育フォーラムが2006年8月1日(火)、10時30分より『美術科教育の「これまで」と「これから」を考える』というテーマで、国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議室で開催され、小・中・高等学校の図画工作・美術科担当の教員や教員志望者など145名が参加しました。

主催者代表として立石学長の挨拶があった後、第1部として直江俊雄先生より、『異文化を通して見た美術科教育』と題した基調講演が行われました。午後からの第2部では、教育現場や教育行政の立場からパネリストを招き、「これからの美術科教育の方向性と展開」をテーマとした事例発表があ

り、続いてフロアからの質問や意見に対する各パネリストのコメント、補足説明などが熱心に行われ17時過ぎに閉会しました。また、閉会後には講師、パネリストを囲んだ懇親会が行われました。

●基調講演 直江俊雄 筑波大学助教授

●パネルディスカッション

パネリスト

直江俊雄 筑波大学助教授

岩崎治彦 東京都教育庁指導部義務教育心身障害教育課指導主事

山崎正明 北海道千歳市立北斗中学校教諭

西 恭子 女子美術大学講師

コーディネーター 佐藤善一 短期大学部部长

モデレーター 遠藤友麗

●後援 東京都教育委員会

●参加者145名の内訳：小学校教諭12名、中学校教諭

54名、高校教諭15名、養護学校教諭2名、

在学生8名、本学教職員19名、その他35名



会場にはヒーリングアート・プロジェクトの展示も

## Topics ● 13 シリーズ教養ゼミ紹介② 林 正寛ゼミ



基礎教養科目の担当教員が自由にテーマを決めてゼミ形式の授業をおこなう「教養ゼミ」。シリーズで紹介する第二回目は林正寛先生のゼミの紹介です。

## 異なる言語がぶつかりあって生まれた言語

「当初受講者数は2、3名だろうと予想していました。」と語る林先生の2006年度前期のゼミのテーマは、カリブ海のハイチで話されているクレオール語を学ぶことだった。

クレオール語とは、互いに異なる言語を話す集団が出会い、新しい共同体を作りながら融合していった言語が、その地域社会の次の世代に母語として受け入れられたもの。ハイチのクレオール語は、1804年に独立するまでフランス領だったハイチで、支配者のフランス語とアフリカから連れてこられた奴隷たちの諸言語がぶつかりあって生まれた言語である。

蓋を開けてみると履修登録者はなんと19名。脱落せずに試験まで受けた学生は14名おり、中には半年の授業では物足りない、一年間やりたかったと感想を書いた学生もいたという。

「普通、言葉というのは実用的な動機があって学ぶものです。クレオール語はたとえば話せるようになって、日本ではほとんど何の役にも立たないというのに、そういう損得だけで動かないところが女子美らしいと言えるかもしれません。学生が一斉に声を出してクレオール語の発音練習をする授業なんて、日本の他大学にはないでしょう。」

## 異質なものを融合させる＝多様性を受容する

クレオール語の面白みはどんなところにあるのか。

「異質なものがぶつかりあって生まれたものって、常に一番面白い。クレオール語はアフリカとヨーロッパの互いに異質な言語がぶつかりあい、融合して生まれた、もはやアフリカにもヨーロッパにも還元できないオリジナルな言語です。実はこのプロセスは一つの国や文化にどっぷり漬かるといふ生き方に対するアンチテーゼにもなるんじゃないのかな。」

現在、アメリカのような移民の国だけでなく、たとえばEUの国々でも民族的に多様であることがノーマルになってきた。異質なものの共存こそノーマルであるとして、社会制度も何もかも組み立て直さなきゃいけない、そういう感覚がヨーロッパの一般の人々の心の中に芽生えつつあります。でもこれはヨーロッパだけでなく、東洋もそうならざるをえないはず。沖縄、アイヌ、在日、台湾人、外国人労働者。すでに日本社会も多様であることが抜き差しならないところまでできています。これに対して昨今、再び愛国心を鼓舞するナショナリズムが高揚してきていますが、これは多様性を受容と伝統的なナショナリズムの最後のぶつかり合いといえるかもしれない。次に来るのは多様性でしかありえません。」

さらにクレオール語は人間の底知れぬ逞しさをも示しているという。

「奴隷たちは異なる出身地から集められたため互いにコミュニケーションが取れず、何とか共有できたのが農場主や農場監督官の罵声や命令口調のフランス語でした。そんな劣悪な環境におかれながら、生き抜くために新たなアイデンティティを模索し、新たな言語を誕生させました。すなわちクレオール語を。つまり人間として極限まで追い詰められながらも、あるいは追い詰められたからこそ、彼らは異質なものにたじろがず、新しい文化を、新しい共通言語を作り上げるという、じつに人間的な創造性を発揮し得たのです。」

## 異質なものを受け容れることに勇敢になる

「これは、海の向こうのカリブ海の話としてではなく、我々の問題として捉えるこ

とができます。例えば後期の教養ゼミでは「沖縄」を取り上げますが、沖縄の「チャンプルー」文化にはクレオール文化と通じるものがあります。沖縄はかつて琉球王国のもと、広く交易をする中で独自の文化を培う経験をした。明治の初め日本に組み入れられ、敗戦後は米軍の施政権下に置かれ、その後日本に「復帰」という歴史を辿る中でも、沖縄は外から入ってくる「異質なもの」を受け入れ、それを独自のフィルターを通して完成度の高い「沖縄的なもの」へと作り変え、発信してきた。現在、沖縄の文化は非常にポジティブな評価を受けています。しかしこれは日本（ヤマト）もやってきたことです。外来のものを受け入れ、単なる寄せ集めとしてではなく、それを作り変え、発信する。本来、日本は異質なものを受け容れることに勇敢だったはず。自分たちの身の丈に合うよう作り直すことに長けていました。これは当然アーティストやデザイナーにとっても必要な資質ですよね。「自分にしかできないもの」を創るってということは、結局はいろんなものを受け容れながら、それを自分というフィルターを通して作り変えていくということですから。」

「異質なもの」が出会い、そこから新しい何か生まれる。これは林ゼミの一貫したテーマでもある。

「出会いが何を生かしてくれるかとても興味があります。私も学生との出会いを通して新しい自分を発見したいし、学生の中にもいずれ何か芽生えてくれるのではと期待しています。「クレオール」でも「沖縄」でも、去年のゼミで扱った「俳句」や「ジェンダー」でも、材料は何でもいいのかもしれない。」

(インタビュー・文 広報課 林亜紀子)



クレオール語の辞書。辞書も教科書も日本語で書かれたものはない。

## J A M ● 女子美アートミュージアム 展覧会情報

### 展覧会開催報告

#### < JAM >

#### 「KIMONO 小袖にみる華・デザインの世界」

女子美術大学美術館に寄託されている染織コレクションと美術館所蔵品から、花のデザインに基づく7つのテーマ「風景の華」「詩歌の華」「吉祥の華」「雅の華」「友禅の華」「絞織の華」「桃山の華」に即して近世の小袖を、41領と桃山時代の裂類6裂を展示しました。ガラス越しではなく日本では稀な露出展示を行いました。来館者には、間近に観る充実感を味わっていただくことができました。

ワークショップでは、「ゴムを使った豆絞り技法で藍染めのハンカチを制作する」「刺繍と摺箔の技法でグリーティングカードを制作する」を開催しました。参加者には体験することにより江戸時代の職人の技の素晴らしさを実感していただくことができました。また、遠山記念館の水上嘉代子学芸員と本学岡田宣世教授によるギャラリートークも開催しました。

関連事業として、シンポジウムを開催し、共立女子大学長崎巖教授、静岡文化芸術大学大学院深井晃子教授、国立歴史民俗博物館大久保純一助教授、株式会社笠仙代表取締役小川文男氏、本学大学院岡田宣世教授の5名の講師より、それぞれの専門分野からみた江戸時代のきもの「花」をテーマとした講演をしていただきました。

(4月28日—6月11日)



#### 「考える公園」

「子どもの想像力開発のためのドローイング教材展」は、本学研究員（2005年9月—2006年8月）である李元求氏の研究発表展覧会として開催しました。李氏は発想力を高める教材開発研究を行っています。当展覧会では李氏が開発した教材とそれを使用して制作した韓国の子どもたちの作品を展示しました。会期中4～7歳の子どもたちを対象にワークショップを実施しました。

(7月5日—7月24日)

#### < ガレリア ニケ >

#### 「平成17年度卒業・修了制作作品展」

平成17年度女子美術大学短期大学部を卒業・修了した学生の作品から秀作を選び展示しました。

(4月9日—4月28日)

#### 「女子美術大学学生作品展」

芸術学部の各学科専攻学生の、課題制作作品を展示

(6月26日—7月24日)

#### 「心いっぱいアート展」

同窓会主催の企画として参加された団体は、「アトリエ・エレマン・ブレザン」・「アートラボ・オーバ」・工房「手と手」、の方々です。主に知的障害のある方たちと共に芸術活動が続けている卒業生とそこに集う作家たちの作品を紹介しました。

多様な技法によって制作された作品からそれぞれのアトリエの個性が観られ、人間が本来持っている才能の素晴らしさを感じることができました。

(5月22日—6月10日)



### 展覧会案内

#### < JAM >

#### 「夏色 秋色 コレクション展」

「夏色」「秋色」といったら、あなたはどんな色を思い浮かべますか？その思い浮かべた色は、あなたの中にある夏や秋の、どんな思い出と結びついていますか？

今回の展覧会では、女子美術大学美術館の収蔵作品より「夏」と「秋」を彩る作品をご紹介します。「眺める—風景—」「味わう—風物—」「思いはせる—旅—」「感じる—色—」の4つのテーマから、作品たちがあなたの夏の思い出・秋の思い出を、そしてその空気においをも呼び起こすように語りかけます。前期と後期は一部作品の入れ替えがあります。

(7月5日—7月31日) 前期

(9月11日—10月20日) 後期



#### 「第28回造形さがみ風っ子展」

相模原市教育委員会主催の市内小・中学校の生徒作品展を屋内展示場としてJAMを会場に開催されます。

(10月25日—10月29日)

#### < ガレリア ニケ >

#### 「ガレリア ニケ 中学生・高校生美術展」

女子美中・高校生と首都圏中・高校生美術展

(9月25日—10月7日)

#### 「デッサンコンクール」

女子美生全員が対象のデッサン作品の公募展です。受賞者は教職員の投票により決まります。

(10月23日—11月10日)

#### 「退職教員作品展」

平成18年度定年退職の教員作品展

(11月20日—12月16日)

## Topics ● 14 公募展受賞者紹介

### 第4回 銀座スペースデザイン・学生コンペティション

○銀座賞・越後屋賞  
田中珠理 (芸術学部デザイン学科4年)

### 第37回 日本色彩学会

○発表奨励賞  
筒井亜湖 (大学院美術研究科修士課程芸術文化専攻色彩学研究領域2年)

### 第91回 二科展

○デザイン部 A部門入選  
糸曾優子 (芸術学部デザイン学科4年)

### 第65回記念手工芸美術展覧会

○大学専修学校の部  
日本手工芸文化協会委員長奨励賞  
武市成子 (科目履修生)

○大学専修学校の部  
日本手工芸文化協会会長奨励賞  
青谷徳子 (短期大学部専攻科)

### 第10回きものデザインコンクール

○一般手描きの部 入選  
江村麻紀 (芸術学部デザイン学科1年)

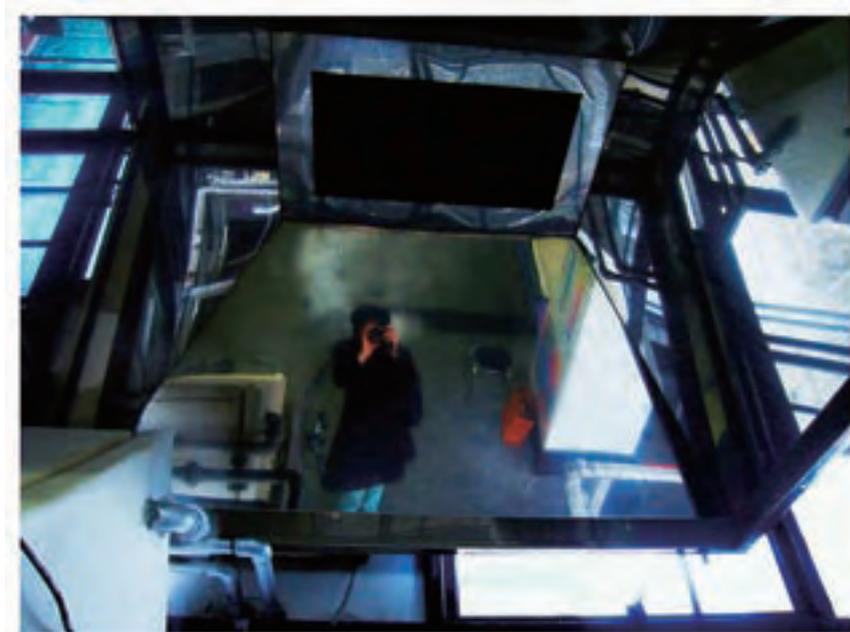


第4回 銀座スペースデザイン・学生コンペティション: 受賞作品と田中珠理さん

## Series ● シリーズ 女子美探訪④ 表現しよう

写真家であるとともに唎酒師の資格も持っているらしい卒業生 迫川尚子さんの撮る女子美のシリーズ第4回目。杉並キャンパスで撮影された写真とエッセイを紹介いたします。

実は、私、C型ウイルス性肝炎と診断され、この半年間、インターフェロン治療を受けていました。C型ウイルスは空中では15分しか生きられません。つまり、空気感染はありえない。私の場合は三才の時の交通事故での輸血が原因だと思われます。365日店で働いて、その合間をぬって新宿の街をほっつき歩き、写真を撮ったり飲んでもらったりという生活から遠ざかりました。C型ウイルスは、体内でも一〜二週間程度の寿命です。ただやたら増殖します。かれら自身は悪さをする訳ではありません。むしろ人間の方が不慣れで、異物とみなし、免疫機能が働いて、ウイルスとともに肝臓そのものを攻撃してしまう。そんな病気です。私にとって、写真を撮ることも、こうして書くことも、それ自体、私の表現活動です。説明は要らない、表現しよう、というのが私のモットー。なぜ表現するのか、と考えながらカメラを持つ訳ではありません。ただ、あえて言えば、何かを壊したいという衝動がいつもあります。そして今、私が壊したいのは、闘病というイメージです。病気は敵なのか？闘う相手なのか



?病気という言葉やイメージに囚われていないか?と疑問に感じました。ウイルスと生物は、長い目で見れば共存の関係にあります。私たちの方に、一時的に拒絶が起こるだけです。それを病気と呼ぶに過ぎません。いったんウイルス性肝炎と病名をつけられると、堂々と酒が飲めなくなる。それは困りました。医者の方「まだ若いから(治療を受ける体力がある)」の一言で決断しました。酒を飲むために、肝臓に住み着いたウイルスを抹殺する。目標が明確化しま

した。だから徹底することが出来ました。仕事を全て中断し、ひたすら寝て、食事に気を使いました。私は、病気と闘ったのではありません。ウイルスをゼロにし、医者から酒 OKのお墨付きをもらうために、きつい副作用にも耐えたのです。全てはお酒のためです。とりあえず目標は達成しました。めでたし!

### 迫川尚子 (さこかわ なおこ) 【写真家】

鹿児島県種子島生まれ  
女子美術短期大学造形科 衣服デザイン教室卒業

広報誌「女子美」の定期購読をご希望の方には毎号無料でお送りしております。ご希望される場合は、お送り先を広報課まで連絡ください。  
また、広報課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせ下さい。  
《広報課》 TEL. 03-5340-4513  
FAX. 03-5340-4523  
[E-mail] prs@joshibi.ac.jp

URL <http://www.joshibi.ac.jp>

発行 学校法人 女子美術大学  
〒166-8538東京都杉並区和田1-49-8  
企画・編集 企画部 広報課  
監修 原田 松野  
発行日 2006年9月15日